
私と年下王子さま

橘 亜衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と年下王子さま

【Nコード】

N6916Z

【作者名】

橘 亜衣

【あらすじ】

異世界出身の、香山絵里（21）。そんな彼女に突然結婚話が持ち上がった。だけどお相手はなんと、14歳の王子様！王族、とか王子様、とか、結婚とか以前に、14歳！？ってことは、中学生！？7歳も年下の旦那様だなんて、絶対に無理！！かといって断ることもできず、彼女は王子のもとに嫁ぐことになりました…。

00 親愛なるお兄様へ

『拝啓、日本のお兄様。』

私があなたの元を去って2年経ちますが、元気にやっていますか？
私はそれなりに元気にやっています。

2年前のあの日、大学の講義中にうたた寝をして、気付いたら異世界に飛ばされてた時はどうしようかと思っただし、これは夢だと必死に現実逃避もしました。

だけどそれは現実で。

知らない世界で生きる術のない私は途中、人攫いにあったり知らないおじさんに売られそうになったりしたけど、今は心優しい人達に拾われて、幸せに暮らしています。

拾ってくれたのはとある国の貴族の方で、子供がいなかった2人は私を実の娘のように可愛がってくれています。

幼いころに両親を亡くした私にとって、2人は間違いなく私の父親と母親という存在です。

いつかお兄様にも会ってほしいと思うけど、やっぱり住む世界が違うから無理ですね。

文字通り、世界、違うから。

そんな両親同然の2人のお願いに、私がどうして断れるでしょう。

実はこの世界、それなりの地位のある人は、20歳までにしかるべき相手に嫁がなければならぬという決まり事、のようなものがある。って。

如何せん、私の家はこの国でも有数の大貴族。

いくら私が養子で、実は異世界出身だといっても、結婚はしないと
いけないみたいです。

異世界生まれはともかく。もう20歳過ぎてるんですけど、いいんですか？

なんて聞いたら、あなたは幼く見えるから大丈夫。と笑顔で言われました。

確かに、日本で大学生やってた頃から中学生に間違われるほどの童顔幼児体型だったけど。そしてそれから2年経った今とその頃と、大して変わっていないけれど。

…喜んでいいのか、正直微妙なところですよ。

どうやら私、17歳で通っているらしく、相手方にもそれで話をして
いるから、と言われました。

うん、まあいいんですけど。

考えようによったら、若く見られるのは女性として喜ばしいこと。
ここは素直に喜んでおこうと思います。

それで、問題は嫁ぎ先、なんです。

大貴族ということは、お相手はもちろんそれに見合った家柄ということ。

聞いてみたら、なんとこの国の王族でした。

はい、もちろん現国王様ではございません。

国王は御年57、もちろん妻である王妃様もご健在です。王様は王妃様一筋なので、愛人や側室を作られたり…なんてことは致しません。

ではなくて。

お相手はその国王様の3番目の息子、アレク王子様です。

王子様と結婚…生まれも育ちもここに来るまでは平民だった私が、まるでシンデレラ…いいえ、彼女も実は裕福な家の生まれなので、ちよつと違いますが。

とにかく、相手が王子様というのも十分驚愕の事実ですが、実は問題はそこでもありません。

実は王子様、現在14歳。

ええ、14歳です。

そして私の本当の年は、21歳。

つまり、21歳の私が、あろうことか14歳の王子様に嫁ぐことに

なつたのです。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。(前書き)

すみません、少し変更しました!!

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。

この世界での両親から、衝撃の事実を告げられてから一週間。

私は今、お城へと向かう馬車の中にいた。

えーと…、もう一回言っておこう。

結婚の話を告げられてから1週間。

なのに、既に私は今日から、王子様のお嫁さんとして、お城に入ります。

…なんか、早くない？

だって普通は、こう、準備とか、色々あるものでしょ？

嫁入り道具のセットの準備とか、心の準備とかその他もろもろ。

それともこの期間の短さは、この世界では普通なの？

と聞くと、いや、早いと真顔で母様に言われた。

いいんですけどね、どうせ何週間経ったところで、腹はくくれないだろうし。

それに私の嫁入りセットは、おいおい家から送られてくるそうだし。

そんな訳で、実質この身一つで王子様の元へ向かっているんだけど。

私、ある重大な事に気が付きました。

なんで今！？って自分でツッコミ入れてしまうほど、初歩的な事実。けれど、それを聞かぬまま王子にお会いできない。

「あの、リースン、つかぬことを伺いますが」

すると、私の前に座っている、銀髪ツインテール美少女が「何でしょうか」と言った。

彼女は私についている侍女で、結婚しても一生お仕えます、という事なので、こうして彼女を連れて行くことになった。

性格はすごく面倒見が良くて、口ではなんだかんだ言いながらも優しい少女。

ただどさずがの彼女も、私のこの質問には呆れるんじゃないか…。

心に不安がよぎる。でも…って、ああもう、考えてる場合じゃないぞ、私！

私は勇気を振り絞ると、リースンにとある質問をした。

「私の嫁ぐ、第3王子アレク様って……誰ですか？」

その時確かに、時は止まりました。

リースンが驚愕のあまり、大きな目を更に大きく見開いて。

口は心なしに半開きで、まるで息がとまったかのよう。

うわあ、美人はどんな顔でも美人だなあなんて見惚れていると、はっと我に返ったのか。

きつと厳しい顔になると、私を険しい目で睨んだ。

「エリ様。今日は一体どういふ日かご存知ですか？」

美人の怒りの迫力に。私はびくりと体をすくませた。

「う、はい。王子様との結婚式の日です」

私が身に纏っているのは、繊細な刺繍が施された白のドレス。いわゆるウェディングドレスだ。

首元には、何カラットあるんだろう……って思うほどの大きなダイヤモンドが付いた首飾り。

肩まであった髪の毛は結われ、頭の上にはキラキラひかるティアラ。

どこからどう見ても、花嫁さんスタイル。

「では、今はどういふ状況かお分かりになりますか？」

「…今は、お城へと向かう真つ最中です」

するとリースンが、はああああ、っと、ものすごく呆れたように長いため息をついた。

「それで、アレク王子をご存じないとは、どういふ意味なのですか？」

「えっと、だつてこの国には、第1王子と第2王子、それに第1王女様しかいないはずですよ？なのに第3王子って、一体誰のことなんだろう……って思いました……」

14歳って、元の世界でいえば、中学生じゃない！？反抗期真っ盛りの、学ラン着ているような。

どうしよう、そんな人と結婚するなんて、しかも7歳も年下だし、犯罪だよね！？

間違いなくロリコンだよね！？

…って、1週間混乱しまくっていたおかげで気付かなかったのだ。

第3王子様っていう存在を、私が知らないことに。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。(後書き)

今日は結婚式当日。

エリさんは、花嫁衣装です。

02 王子のことを、教えて下さい。

「……………」

む、無言の沈黙が怖い。突き刺さる視線が痛い。

ちらりとリースンの方を見ると、彼女は眉をひそめながら頭を抱えていました。

その顔にはありありと、

(どうしてくれようかこの人は)

って、書いてあった。くつきりと。

これはきつと、結婚が決まったっていうその時に聞いておくべきこととで、お嫁に行く当日に尋ねることじゃない。

ほんとうに、この1週間錯乱すぎだよ、私。

やがて、ややあってリースンが口を開いた。

「そう、でしたわね…。考えてみれば、エリ様がこちらにいらしたのは2年前。でしたらアレク様のご存じではなくても仕方ありませんわ」

ちなみにリースンは、私が異世界からやってきた、って知ってる数少ない人間の一人。

この世界でそのことを知っているのは、リースンと、それから母様

と父様だけ。

「ですが、そういうことはもう少し早くお気づきになるべきですわ」「はい、すみません…。14歳っていう衝撃の年齢に思いのほか意識がいつてしまいました」

私はぺこりと素直に頭を下げる。

全くもって彼女の言う通りだから。

でもさすがに情報皆無状態でお会いするのはどうかと…。
かといって今更ながらなこんなこと、リースン以外に聞けないし…。

って顔をしてたら、勿論リースンはきちんと教えてくれました。

ため息まじりに、だったけど。

「この国には、エリ様をご存じの通り、お2人の王子とお1人の女王様がいらつしゃいます。ですが実はその下にもう1人王子がいるのです。それが第3王子アレク様…エリ様の嫁がれる方ですわ」
「でも、私、知らなかったんですよね。それにそんな話も聞いたことがなかったですし」

他の王族の方はもちろん、知っていたんだけど。

だから王族に嫁ぐって聞いた時、てっきりそのどちらかの王子様だと思ってた。

でも考えてみたら2人とも、もう20は超えてるし。

しかも3番目の王子…って、え、誰それ？みたいな結論に至ったの

がついさっきだったという、なんとも残念な私の頭。

「アレク様はエリ様がこの世界に来られた2年前に、他国へ留学なさいましたの。それからこの国には一度も帰られておりませんわ。ですからエリ様をご存じないのも無理はありません」

なるほど、つまり私と入れ違いにここから出て行ったのね。

道理で知らないはずだよ。

それにしても、2年前…っていうことは、12歳かあ。その歳で、他の国に留学だなんて、たいしたものだよ、うん。

私が12歳の頃なんて…小学生でしょう？お兄ちゃんに夏休みの宿題を全部押しつけてたような、ダメダメ生徒の模範のような子供だったよ。

あの時は、まるまる一カ月分の日記を丸投げしてごめんね、お兄ちゃん。

それにしても、この国の王族はみんなそうなのかな？そんな、そんな年齢から留学とか。

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「そんなことはありませんわ。現に留学されたのは、アレク様だけですもの」

聞けばアレク王子、幼い頃から『神童』と呼ばれる程の切れ者で、その実力は王様をはじめとした城の者全員が認めるほど。

もっと彼の才能を伸ばすため、そして更なる知識を増やし、見聞を広めることは、将来国を背負って立つ国王としては必要な事だろう。ということ、満場一致で12歳という年齢ながら他国へ行ったそう。

「……って、ちょっと待って下さい」

今、あっさりと聞き流せない単語を耳にしたような。

知識習得のため、見聞を広めるため。それは分かった。

けれどその後。

将来国を背負って立つ、『国王』

だって、第3王子でしょう？3番目でしょう？後を継ぐのは、こういう時、普通は長男である第1王子なんじゃないの???

「いいえ、この国の王位第1継承権は、アレク様ですわよ？」

聞き間違いであってほしい。そんな私の願いをあっさりと砕くように、リースンはきっぱり言い切った。

私が、なぜ、なんて聞く間もなく、リースンは理由を口にする。

「だって神童ですよ？それに、その歳で、既に国政の一部を担っ

ていたのです。次期国王として、これほど相応しい方はいらっしや
いませんわ」

え　と、……つまり、私の旦那様は未来の王様で、私はそんな
方の妻。

それって、私が次期王妃っていうこと、なんでしょうか……？

私の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、リースンはこくりと頷く
と、

「その通りですわ」

そう答えた。

……どうやら私は、年齢差に気を取られ過ぎていて、とても大変
な立ち位置に立たされていることを、今更ながら認識致しました。

02 王子のことを、教えてください。 (後書き)

肝心の王子様が出てくるのは…もう少しだけ、先です。

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。(前書き)

私の小説を閲覧していただき、ありがとうございます!!

お気に入りも100件を超えたみたいで、嬉しいの一言です!!
本当にありがとうございます!!

(01を少し変更しました…)

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。

国王とは、国のトップに君臨するお方。

その妻は、王妃と呼ばれる。

…14歳の次期国王と、異世界出身21歳の未来の王妃。

現国王様は、若くはないし、失礼な話だけのご病気で…なんて今すぐなってもおかしくない。

そうなったらすぐにもアレク王子が国王になる訳で。

いくら神童、なんて言われてたって、まだ14歳の少年でしょう？しかも、それを側で支える妻が、この世界のことを、まだあまり理解できてない私。

私の頭に浮かんできたことは、1つ。

大丈夫なのかな、この国。

だけど、私はそんな未来のことを心配している場合ではなかったのです。

がたんがたん、と、道を走る馬車の車輪、そして馬の蹄の音しか聞こえなかった中に。

ざわざわと。

人の声が出した。

それも、お城へ近づくとつれ、その音が大きくなっている。

「?なにか、人がたくさん集まっている気配がしますね」
「当たり前ですわ。だって未来の国王の結婚式ですよ?これは国家の1大イベントですもの。国中から一目見ようと、国民が集まっていますわ」

1大イベント。確かに。

日本でいえば、皇太子の結婚式、みたいなものだよな。

後はイギリスとか他の国でも大々的にやってたっけ。テレビでも、生放送、とかで。

やばい、今自分がその中心にいるかと思うと、途端にドキドキしてきた...!!

だって、私、容姿も普通の平々凡々人間だし、そんな、注目される人生送ってきていないですから!

そんな私の緊張をよそに、ざわめきが大きくなるなか、馬車は静かに止まった。

馬車の扉がゆっくりと開く。

まず目に飛び込んだのは...

どこまでも続く、真っ赤な長い絨毯。

そして。

割れんばかり、大音量のラッパのファンファーレ。

「未来の王妃、エリ様がご到着されました!!」

そして高らかに宣言される男性の声に合わせて、カーペットの両側に立つ兵士たちが一斉に敬礼をした。ここでひと際大きくなる大歓声。

「うっ…」

き、消えて、しまいたい。なんなの、この大層なお出迎えは。

大袈裟すぎやありませんか!?

私に、あのレッドカーペットを渡れと? 周りが大注目の中?

こんなの、生で見るの初めてだよ。ハリウッドスターがキラキラ笑顔を振りまきながら通る、そんなやつだよな?

「リースン、私無理」

「何を今更」

「だって、私今日10センチヒールですし!! こけますって!! あんなに人が見てる中それをすると思うと、恥ずかしいじゃないですか!？」

しかもドレスの裾は、恐ろしく長い。私の身長分はありそう。

私の夢は、外国の小さな教会で、慎ましやかな結婚式をあげることだったのに。

まあ外国っていうのは、あながち間違ってはいませんが。スケールが大きすぎる。

全然憤まじやかじゃない。むしろ真逆をいつているこの感じ。

私が必死の形相で訴えてみたけれど、侍女は満面の笑みを浮かべてスルー。

手早い手つきでベールを私の頭にかぶせると、

「エリ様。さあ、覚悟を決めて、行きますわよ！」
「きゃあ」

勢いよく後ろを押されて、私の体は外に投げ出された。
うわあ、こける!!!しかも顔面から……!!??って思っていたら、誰かが私をナイスキャッチ。

「怪我はない?可愛いマドモアゼル」

さらりとそんな台詞を、甘やかな声で言ったのは、第1王子のハーベイ様。

灰色の相貌で私を見つめると、その端正な顔立ちに蕩けるような微笑みを浮かべた。

ああ、眩しくて溶けてしまいそう…。

そんなことを考えていると、王子は私の左手を自分の右手と重ねる。

「!?!」

え、なんですか、この状況。なぜに第1王子様が私の手を?

なんて思いながらぼかんと王子の顔を見てみると、不意に反対の手を誰かに掬われた。

「え」

今度は何事なの、と思つてそちらを見れば、短く刈り込んだアツシユの髪と瞳を持つ第2王子、マエスト王子が無言で立っていた。

ハーベイ王子と同様、こちら目元涼やかな、やはり美形。

「エリ様、行こう、アレクがお待ちかねだよ」

私よりも1オクターブ高い声に振り返れば、流れるような亜麻色の髪をウェーブさせた美少女、第1王女マリア様の姿が。

そしてこちらも超が付く程の美少女。

…この世界に来てから思つてたんですが、何気に美形率が高いです。

その中でも王家の血筋は格別で。

王様はもとより、王妃様は若い頃は国一番と謳われる程の美人さんだったそう。

そんな訳で、その血を色濃く受け継いだ王子王女様方は、私のような者が直視するのは恐れ多いほどの美貌の持ち主。

そんな王子2人に両手を取られ、ドレスの裾を王女様とこれまた麗しの侍女リースンに持たれ。

更にもう一度後ろを振り返れば、ひしめくほどの、大勢の観衆の皆

様の姿が。

分かります、ええ、感じますとも!!
皆が私に注目しているのが嫌と言う程!

…ええい、もう、こうなったら行くしかないじゃないですか!!
両隣りに人が付いているんだから、転びそうになっても助け
てくれるだろうし。

私は、2人の王子にエスコートされ、王女と侍女に裾持ちをされ、
大勢の観衆に見守られながら足を一歩、踏み出しました。

03 ここまで来たんですから、覚悟を決めましょう私。(後書き)

いよいよ結婚式が始まります。

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。 (前書き)

読んでいただいている皆様、誠にありがとうございます。
ようやく、肝心の王子様がちょびつと、出せました…！

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。

長い長いそのカーペットの先は、お城の大広間につながっていて。

そこには今までいた兵士とお城の侍女たちの代わりに、今度は貴族の皆様がずらりと勢ぞろい。

顔を見たことないような方から、前に視線を向けるにつれ、私でも名前を知っている大貴族の方々が見えました。

さっきまでの喧騒が嘘のように、中はしんと静まり返っていて。

ため息一つこぼせない程の静寂。

その時。

私が入口に立ったのと同時に、元いた世界でもお馴染みのあの音楽が、大音量で鳴り響いた。

タタタタン、タタタタン、から始まる、結婚行進曲。

しかも、広間の隅の方で控えていたらしい、オーケストラの生演奏。

世界は違っても結婚式での入場の音楽は一緒だなんて、なんだか不思議な気がする。

ふっと気付くと、両隣りにいた王子の姿はなくて、代わりに立っていたのは私の父様。

父様は私をじつと見ると、ふわりと優しく微笑んだ。

言葉はなかった。けれどその瞳は言っていた。

(大丈夫、何も心配することはない)

そんなに私、不安そうな顔してたかな???

…うん、してたかも。だって顔も初めて見る相手、しかもその存在をきちんと認識したのもついさっきっていう状態で。

その上相手は7歳年下の次期国王様。

動揺しない方がおかしいと思う。

けれど、その顔を見て私の心は少し軽くなったみたい。

ありがとうございます、父様。私もそんな気持ちを込めて微笑み返した。

礼服、のようなものに身を包んだ父様と私は、その後仲良く腕を組んで参列者たちの間を通り抜ける。

…そういえば、お兄ちゃん言ってたなあ。

俺が父親の代わりに、ウエディングドレスを着たお前と一緒に花道を歩くんだからな!!って。

だけど、ごめんなさい。

それはもう無理みたいです。この世界にはいない兄に、心の中でそっと謝った。

そして。

広間の終着点に立っている、一人の人間。

白いタキシードを着た、金色の髪の毛をした人の姿が、そこにはありませんでした。

「……………っ!」

ベールで視界がぼやけて顔ははっきり見えないけれど。

絶対、絶対あの人だよ、アレク王子って。

だって白い服着てるし！祭壇の前で立って私を待つ人なんて、新郎しかないよね!?

顔が見えそうになった瞬間、私は思わずベールの下で顔をうつむかせる。

14歳、この人が、14歳の王子様…。

見たいような見たくないような、そんな複雑な心境で。

どうせこれから先嫌と言うほど顔を合わせるだろうのに、私はささやかな抵抗を試みる。

さっき不安を軽くしてもらったばかりだけど、やっぱり実際目の前にするとそうもいかないみたい。

心がざわめく私をよそに、ついに父様から王子の手に私がバトンタッチされた。

その手が驚くほど冷たくて。一瞬体をびくりとさせる。

私は王子に手を握られ、目の前の階段を一步、また一步と昇る。

なんだか死刑台に向かう気分…とまでは絶望的なものではないんだけれど。

他の花嫁さんたちと同じ、幸せな気持ち、には程遠いのは確か。

階段の先には祭壇があつて、牧師さん…よろしく、国王様が神妙な面持ちで立っていました。

ゆっくりとフェードアウトしていく音楽。

それと共に再びあの静寂が戻ってきた。

張り詰めた空気に、私は再び緊張していくのを感じる。

やがて、王様が厳かな声で言葉を発した。

「アレク・ガイナ・ブリストル、汝、病める時も健やかなる時も、共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、エルミニ王国国王の名のもとに、誓うか？」

「はい、誓います」

隣から発せられた声は、まだ少年の名残を残した、少し甲高い声。

声を聞いて思う。やっぱり彼は、王子はまだ14歳だって、改めて実感させられる。

次は私の番、です。

「エリ・サイレン・シルバーナ、汝、病める時も健やかなる時も、

共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、エルミニ王国国王の名のもとに、誓うか？」

…ここで、誓いません、なんて言ったらどうなるんだろうって考えるけど、勿論言いませんよ？
空気はきちんと読めますから。

「はい、誓います」

声が少し裏返ってしまったのは、大目に見てください。

それから次は、指輪の交換。

なぜかサイズがぴったりの銀の指輪。

いつ、どのタイミングで測ったんだろう。あつらえたみたいに、しっくりと指になじむ。

それにしても、王子様、女の私が憎らしくなるくらい、細くて綺麗な指をしてる。色白だし。

私と同じぐらいのサイズなんじゃないんだろうか、これ…。

いくら年下とはいっても、これはかなりへこむかも…。

そんな複雑な思いの中交換タイムも終了し。

最後に。

やっぱりと言うべきか結婚式と言えばおなじみの、あれが最後に待ち受けていました。

「それでは、2人、誓いのキスを」

04 永遠の愛を、誓ってしまいました…。 (後書き)

結婚式…出たことがないので、こんな感じかな、と思いながら書き
ました。

難しいですね…。

05 まさかまさか、まさかです！

キス。

もちろん21年生きてきて、これがまさかのファーストではありません。

ええ、ありませんとも。

ちなみに私の初めては、隣の家ダンじいちゃんだという話でもじいちゃんとのそれなんて私が赤ちゃんの時だっていうんだから、まったく覚えていない。

ということは、実質これが私の初めての…ってことになります。

恋人いない歴〓彼氏いない歴っていう可哀そうな私なんだから、仕方ないこと。

…だって、正直日々を生きて行くのに精いっぱい、恋とか愛とかしている暇なかったし。

その貴重な二度目が、まさか今だなんて！！

向かい合った私のベールが、そっとはがされる。

…つまり、ここで初めて件の王子様と初対面となるのですよ。

いつまでも顔を床に向けている訳にもいかない。

私は意を決して前を見据えました。

「……………」

予想はしてました。

あれだけ美男美女勢ぞろいの家系なんだから、アレク王子もその例から洩れないと。

実際初めて見た王子は、金髪碧眼、容姿端麗、その上どこからやってくるのか、キラキラ光る光の粒子をまき散らした笑顔は、破壊力抜群。

ただ。

か、か、可愛すぎる…！

おとぎ話に出てくるような、理想的な白馬の王子様…に、あと何年か経てばなりそうだけど、今のところはその予備軍。

天使のような外見の美少年。はい、少年です。

14歳だ、もう驚くほど、その年齢通りのお姿で。

身長も、私とあんまり変わらない。

これが、例えば第2王子のマエスト様みたいに、年齢より老け…じやなかった、大人っぽく見えるタイプだったらまだ、私の中でも色々ふっきたかもしれないけれど。

駄目、私の精神は、そこまで強くありません。

そんなことを考えているうちに、王子の顔が近づいてくる。ゆっくりと、私の唇を目指して。

そして。

目を閉じるっていう暗黙のルールすら忘れていた私は、アレク王子を凝視したまま、口付けをされていました。

……その後は、あんまり覚えていなくて。

ただ、真っ白になって完全にショートした頭で、それでも笑顔を作った、お城の下にいた大勢の人たちにお披露目をし、馬車で王子と共に街にある中央広場をぐるりと一周して。それはなんとなく記憶にあります。

けれどひどく体力気力共に消耗していて、あてがわれた部屋に戻ってから私は、そのままベッドに倒れこんで。

そこから記憶がぶつつり途切れました。

小鳥の鳴く声。

甲高いさえずりが聞こえて、私はふと、目を覚ましました。

「う……」

まず飛び込んで来たのは眩しい日の光。

「あ、さ？」

あれ、昨日私どうしたんだっけ…？

私は寝起きの頭を必死に回転させて、記憶を掘り起こす。

確か式が終わった後、色々キャパがオーバーして、それに疲れてたのもあって、ドレスを脱いでそのままベッドに直行だった気がする。

そして一回も目を覚ますことなく、熟睡。

で、今に至る。

「ん……」

隣で寝ていた人が、軽く身じろぎをする。

「……………え????」

ちょっと待って、私の隣で、寝ている、人？

太陽の光でキラキラ光る金の髪を持つその少年は、とても見覚えのある人物で。

「え、何なんですか、この状況」

待って、待って、待って!!

私しがばつと毛布をめくる。

私は、なんかベビードールみたいなひらひらフリルのついた服を着ていて。

これは部屋にあったもので、他に着るものもなかったし、とにかく早く休みたかったからってあまり深く考えずに着た。

こうして明るいところでみると、恥ずかしいですが、なんか、透けてますし。

そして少年の方かというと……なぜか一糸纏わぬ生まれのままの姿…。

「うわあああつ!!!!!!」

私は思わず毛布をかけなおす。

え、何、これって、あれ????あれなの???

私、中学生のような男の子相手にアレなの???

アレしたの!?!?!

だって、昨日はそのまま寝て、私一回も起きなかったよね!?

寝るときは、確かに一人だったよ、ね???

ひとりあたふたしていると、目を覚ましたのか、少年がゆっくりと目を開いた。

ふわふわの髪にひよっこり寝癖を付けた可愛らしい彼は、私を見て微笑む。

「エリさん、おはよう」

それから、彼はそのあどけない顔をぽつと赤らめて、少し顔を赤らめながら視線を逸らした。

え、この感じ、何ですか？

彼、なぜかもじもじしてますし。

もしかして、私、少女マンガとかドラマでおなじみの、あのベタベタなシーンですか!？

ほら、よくあるじゃない、鳥の声で目が覚めて、恋人たちが2人、ベッドの上で目を覚ます、的な。

2人とも、あられもない姿で、的な。

的な。

もしかしてそんなお約束な展開ですか!？

未成年相手に？

しかもこの反応、私からごにゃごにゃな感じで!？

その瞬間、私の口から言葉にならない大絶叫が、お城中に響き渡りました。

05 まさかまさか、まさかです！（後書き）

なんてベタな展開（笑）

それにしても長かったです。

ようやく王子様の顔が出せました。

これからエリさんとたくさん絡ませてあげたいです

05・5 アレクの独白（前書き）

アレク王子の心中です。

05・5 アレクの独白

今日という日を、僕は心待ちにしてたんだ。

2年前のあの日、あの人と出会った時、僕は柄にもなく、運命の女神様っているのかなって思った。

今までモノクロだったのに、急に色が付いたみたいに鮮やかに世界が見えて。

あの人のことを考えただけで、胸が苦しくなつて。

これが、この感情が、世間でいう『恋』だって気が付くのに、時間はかからなかった。

おかしいよね。

そんな感情、今までくだらないって考えてた僕なのに。

気付いたら、僕はすぐに動き出していた。

彼女のことを調べて、国王を説得して、彼女との結婚を約束させて。

あの人と結婚できる！

そう思っただらいてもたってもいられなくて、本当は4年だった留学期間を、2年で成果を出してここに帰ってきた。

ようやくあの人と会える、って喜んでいたのに、彼女は式の最中もずっと上の空。

しかも、記念すべき初めての日に、エリさんは僕を残して一人夢の中。

こんなのって、許せないよね？

だから僕は、夜中にこっそり忍び込んで、寝顔を見て。

その時ちよつとしたいはずらを思いついたんだ。

もし、一緒のベッドにもぐって、それに気づいたらエリさん、どんな顔するかな。

それが見たくて、僕はそつと体を忍び込ませた。

それから朝になって。

僕の方は浅い眠りだったから、エリさんが起きたのもすぐに分かった。

ただ彼女がしばらく動揺しているのが気配で感じられたから、そのまま寝たふりをしていた。

それからタイミングを見計らって、僕は目を覚ます。

予想通り。

何があったか分からないって顔。

だから、僕は顔を赤らめて、ちょっとはにかんだ顔を試みせた。

そしたらエリさん、そういう感じで勘違いをしてくれた。

だけど悲しいかな。

僕の見たかったものと、それは少し違ってて。

あの人の顔に浮かんでいたのは、恥ずかしさ、とかそういうものじゃなくて。

自分に対しての罪悪感と、僕に対しての罪悪感。

年下の僕に手を出してしまったらしいことに対しての。

その瞬間、僕は悟った。

この人は、僕をそういう対象として見てくれてないって。

年の差なんて関係ない。僕はそれでもエリさんがいって思ったんだから。

だけど彼女はそうじゃないみたいだ。

そのことをはつきり感じられて、少し悲しい気持ちになったけど。

今はそれでも構わない。

一緒にいられるのなら、それでいい。

それだけで、僕は幸せだって思えるんだから……。

06 誠心誠意、謝罪しましょう。

「うわああ、私、最悪……」

この世から消えてしまいたい。最低、まさかあんな可愛らしい王子様に手を出すなんて……！！

元いた世界だったら、完全に犯罪者ですよ、私。

一応好みは年上男性のはずなのに。

そういうシヨタコンの気はなかったはずなのに！

しかもあの後勇気を出して色々聞くと、どうやら私は「激しかった」らしく。

…その上、シーツの上には血痕が。

なかったことにしてしまいたい。

そうしてしまいたい。

いや、その、世間一般的に、昨日は結婚した二人の初夜、ということ、そういうアレが行われるのはむしろ当たり前なのかもしれないけど。

何度もいうように、相手は年端もいかない7歳年下の少年ですよ！
そんなあどけない彼にあんな顔をさせるなんて、私は大人として失格です！

しかも覚えていないとか…。

ああもう無理、立ち直れない…。

王子が何も言わずに出て行ったあと、私が部屋の隅っこでうつろくま
っている、扉がドンドンとノックされる音が。

声を出す気になれず、無言でいると、問答無用で開けられた。

…ならノックする必要はあったのかな。

そしてそんな無遠慮な事をするのは、私の知る限り一人しかいない
訳で。

見覚えのある銀色の頭がひょっこり見えました。

「エリ様、もうお昼ですわよ！起きていらっしやるのなら返事ぐら
いなさって下さいな」

「リースン」

トゲトゲしい声でそう言った彼女だったけど、私の憔悴した様子
を見ると顔色を変えた。

「い、一体どうされたんですの？そんな部屋の端で小さくなられて
もしかして、具合が悪いんですの!？」

彼女が心配そうに近づいてくる。その姿を目にした瞬間、私は…。

「う、リースン、どうしよう!!私、極悪人になってしま
いましたあ!?!」

私はさすがのようにリースンに泣きついて、さつき起こった出来立てほやほやの事件について語ったんだけど。

結論。

彼女は取り合ってくれませんでした。

そんなの、夫婦になったんだから当たり前、だの、王子ももう14歳で子供も作れる年齢だから気にすることはない、なんて軽くあしらわれたんですが。

いやいやいやいや、確かに正論ですよ？至極ごもつともな意見ですが。

こう、ね？心がもやもやするというか、元の世界でいったら、学ラン着ている男の子に悪戯するもんですよ？

日本なら絶対、なんちゃら罪とかで捕まるって。

それからずっと、頭をひねりながらどうすればいいか考えたけれど。

だめだ、何も思いつかない。

ただひとつ思いだしたことがあって。

…そういえば私、きちんと王子に謝ったっけ???

自分がしでかした罪の大きさを頭がいつぱいで、きちんと謝罪をしていなかったことに今更ながら思い当たる。

ならば、私が今すぐにすべきことは。

私は出された朝ごはん兼昼ごはんもそこそこ済ませると、アレク王子に会うべく慌てて部屋を飛び出しました。

王子の居場所を聞くと、今はちょうど自室に戻っている、ということだったので、そちらへ足を向ける。

部屋の外でリースンを待機させて、私は一人中に入る。

そして体を中に滑り込ませると、私はまず頭を下げて開口一番謝罪の言葉を口にした。

「謝って済む問題ではないことは、十分承知の上です。許してほし
いだなんて言いません。ただ、どうしてもきちんとお詫びしないと
と思ひまして」

「……………」

王子の声がかすかに震えている。

まさか昨日のことを思い出して泣いているんじゃないか…!?

不安になった私は、頭をあげて……………って、あれ？

なんか、思ってたのと違う。

王子は下を向いて、肩を震わせて…そこから声が漏れていて。

その声は徐々に大きくなって。

そしてどう考えても、それは泣き声ではなく。

「はっはっは、ふ、ふふふ、あ、ああ、ちょっと待って!! あっはっはっは」

こらえきれずに大声になった王子は。

……………目に涙をためながら笑っておいででした。

「あ、あの」

あれ、今笑いどころってあつたっけ???

私がぼかんとしていると、王子は眼のふちにたまった涙を拭きながら言った。

「まさか、今朝のあれ、本気にした?」

未だ声をひきつらせながら、王子がそう尋ねる。

私の頭にひたすら浮かびまくるクエスチョンマーク達。本気も何も、あれだけ状況証拠が揃っている状態で…。

目を点にしていると、アレク様が驚くべき発言をした。

「あれね、全部嘘だから」
「嘘!？」

なんですと!？

「え、でも、アレク様、服着ていなかったですし」
「うん、わざと」

悪びれもなくそう言う。

「だって、顔を赤らめたり視線を逸らしたり」
「あれは演技」

何それ!？

「それに、激しかったって」
「エリさんの寝相がね」

確かに私の寝相は悪い。キングサイズのベッドから転げ落ちること
もしばしば。

でも。

「じゃ、じゃああの血は」

「あれは寝返りを打ったエリさんの爪が、僕の腕を引っ掻いたから」
そう言っただけ見せられたのは、なるほど、確かに誰かに引っかかれた
ような痕がある。

「それでは、つまり」

すると、アレク様は天使のような無邪気な微笑みを浮かべながら、
さらりと仰いました。

「もちろん、エリさんが勘違いするように僕がわざと仕向けたこと
だよ」

07 可愛さとは、罪深いものです。

現在の状況。

今朝起こったあれ、実は王子様の狂言だったことが分かりました。

「ちょっと待って下さい!!」

私は思わず王子に詰め寄る。

「なんでそんなことをするんですか!?!」

私は大変なことをしでかしてしまった!?!と思っただけで色々悩みまくっていたのに!!

これは一体どういうことですか!?!

大人をからかうもんじゃありませんよ!?!

だけど王子は怒り狂う私をみても、なんら反省の色もありません。それどころか悪びれる様子もなく、しれっとした様子で言いました。

「え、ただびつくりさせようと思って」

ええ、ええ、確かに目ん玉ひっくり返るくらい驚きましたよ。

道理で記憶がないはずだ。だって本当に何もなかったんだから。

とりあえず、自分が犯罪者にならなくてよかったとそこは一安心だけど、これは7歳も年上の私としては、きつちりと叱らないと。

「アレク様、やっていい冗談と悪い冗談がございます。アレク様が生じたことは、間違いなく悪い方です」

すると、王子は私が怒っている様子を確認すると、急に顔を曇らせた。

「…ごめんね、もしかして、怒った？」

青の瞳をうるうるさせ、こくりと横に首をかしげる仕草。

しかも、今王子は椅子に座って私を見上げている状態な訳で。

「うつ…!？」

い、いかんよ、私、流されたら。

いくら王子がとてつもなく愛らしい美少年だとしても、これは許せる問題じゃないから。

悪いことは悪いって叱る大人がいないと!!

自分にそう言い聞かせ、必死に抵抗してみるも……。

「そうだよね、本当は昨日、エリさんに会えるの楽しみにしてたのに、あんまり話せなくて。それで式が終わったらいっぱい話そうと思ってたのに肝心のエリさんは寝てたから。なんだか僕、悲しくなっちゃって。だから、ちょっと困らせてやろうって思ったんだけど…。ほんとうにごめんなさい」

大きな瞳が少し赤くなり、今にも泣き出しそうなこの表情。

なんだか私が、かよわい子供をいじめたような気分……。

あーうー、頭の上に、ワンちゃんのしゅんと垂れ下がった耳が見えるよ。

そんな顔されたら、そんなポーズされたら…。

「……………まあ、次からは気を付けてください」

はい、降参です。

白旗を振りました。

無理でした。

これがその辺の生意気盛りの子供だったら絶対に許さないけど、相手が悪かった。

絶対に分かっててやってるだろう、そのポーズ！
って思っけていても、その愛らしい魅力に負けてしまう弱い私…。

ああ、可愛いつてホント罪。

それに、確かに王子のやったことはかなり悪質なものだけど、私がそもそも悪いんだし。

うん、そう。王子だけを責められることじゃない。

そう結論付けることにした。

それにしても。

さつきは謝ることしか頭になかったから気付かなかったんだけど。私はあらためて部屋の中を見渡す。

もちろん嫁いできた私の部屋よりは広い。なんせ次期国王様ですから。

なんだけど。

私が見張っているのは部屋の広さでも、華美な装飾品の数々でもなく。

部屋いっぱい広がる、書類や本の山。

王子の目の前には大量の紙が広げられており、莫大な数の本が入りそうなほどの大きな棚から、それでも足りないのか、入りきらない分が床に積み重なっていて。

ソファやキャビネットの上もそれは同様。

果てはベッドの上にも束がある。

ここに来て2年、文字は日本語とは違っていただけ、勉強したのでそれなりに読み書きはできるようにはなった。今じゃ一般の書物ぐらいは読めるんだけど、目の前の机の上にある書類の文字は、一見しただけでも難しそうな単語がちらほら。

「アレク様、これらは一体……」

私が部屋中に散りばめられたそれらを見ながら尋ねると、王子はバ

ツのわるいような笑いを浮かべた。

「ごめんね、僕の部屋、散らかってるよね」

「いえ、そういうことではなくて」

「一体何なんですか、と尋ねようと口を開く前に、後ろの扉が乱暴に開け放たれた。」

「アレク、悪い、ちょっといいかな？」

髪を振り乱し入ってこられたのは、ハーベイ王子。

昨日のきらびやかな衣装とは違って変わって地味な装いだけど、これもまた素敵。

イケメンさんは何を着ても似合うらしい。羨ましい限りだ。

王子は小走りで部屋に入ってくると、手元の紙を見ながらアレク様に声をかけた。

「実はこここの部分で聞きたいことがあって……あ、君は……、エリちゃん？」

そこで私の存在に気付いたのか、彼はしかめっ面だった形相に笑顔を浮かべ。

それからアレク王子と私を見比べると、困ったように頭をかきむしりました。

「え……っと、今はお取り込み中、かな？出直した方が」

「いえ、いいえ、私の用事はもう済みましたから!!」

どう見ても、ハーベイ様の方がお取り込みのよう。

私の目的は、まあ達成されたんだし、ここはハーベイ様に譲らないと。

私は軽く頭を下げると、退室の体勢をとる。

部屋を出る前にちらりと見えた2人の王子は、なんだかとても真剣な顔つきで書類とにらめっこしていた。

外に待機させていたリースンに声をかけ、私達は自室へと向かって歩き出す。

「それで、謝罪はうまくいきましたの？」

「あー、うん、そうですね、うまくいったというかなんというか」

そもそも私が謝るようなことはなく、単なる勘違い、だったんだけど。

それも、アレク様本人が仕込んだっていう。

「まあそのことは終わったことなので」

「なんですの、何か怪しいですわね。はっきり仰って下さいな」

「えーと、実はあれはアレク様の狂言だったっていうか」

「狂言…嘘だったんですの？あのことが？」

「そう、それで…」

2人でそんな会話をしながら廊下を歩いていると、後ろの方から誰かの呼ぶ声が聞こえてきた。

「？」

私の名前だった気がして振り返ると、そこにはさっきも部屋でお会いした第1王子様のハーベイ様が、手を振っていた。

「エリちゃん！！」

走って来たんだろう、うつすら汗ばんだ様子で王子は私達の元へやってくる、足を止めました。

なんなんだろう、もしかして私に用事？

でも王子と会ったのは、昨日のエスコートの時とさっきの部屋と、まだ2回目で、ろくに話もしていないのに…。

私が訝しげに王子の顔を見上げると、彼はやっぱりお美しい顔に極上のスマイルを浮かべると、予想外の言葉をかけられました。

「よかった、君に少し話があつて。今からちよつと時間、ある？」

08 お兄様と、3時のお茶です。

時間带的にもおやつの場合だったので、私と王子は中庭でお茶することになりました。

ポカポカ陽気で天気もいいし、風もそんなに強くないから快適！太陽の光が直接当たらないように、パラソルのようなもの（もっと高級そうな感じですが）をさした下で、私達はリースンの入れてくれた紅茶とお茶菓子をつまんでいました。

「こない日は、昼寝とか、いいと思わない？」

キラキラした瞳で、ハーベイ様が私にそう尋ねる。

「はい、そうですね」

私は王子の言葉にそう返しながら…内心すごく戸惑っていました。

急に、今から話をしよう、なんて言われて、2人で中庭でお茶なんかして。

しかも用事がある風だったのに、一向にそれに触れる気配がない。

一体何をお考えなのか。

気になって、せっかくのお茶の味も色とりどりのマカロンの味もよく分からない。

心中を探るように王子の顔をじっと見つめていると、視線に気が付

いたのか不思議そうに私を見返した。

「…どうしたの？そんなに俺の顔を見て」

「いえ、その」

どうしたも何も、あなたが話があるっていうからここに来たんですが。

もちろん、美形な王子様とお昼のお茶は楽しいですし、かつこいお兄さんを見るのは目の保養にはなるんだけど。

「…ハーベイ様、そろそろ、私を呼びとめた理由、教えて頂けないでしょうか」

さすがに我慢の限界。

正直、気になって気になって仕方がない。

耐えきれずそう尋ねると、ハーベイ様は不満げに口をとがらせる。

「えー、エリちゃんはアレクのお嫁さんでしょう？ってことはつまり、俺の妹、ね？なのにそんな他人行儀に、ハーベイ様呼びはひどくない？ここは、『お兄ちゃん』って呼ぶべきだと」

「え」

…まあ、確かに世間一般的には、ハーベイ様は私の兄、義理兄です。

そして私の質問は無視ですか。

けど、さすがの私も出会って間もないお方を、しかも王族に「お兄

ちゃん」なんて気易く呼べるほど、肝はすわっていない。

しかし、この人がそれを望むのなら、私は最大限努力しなければ！

「お、お、お兄……様」

ちゃん付けは、まだまだ難易度が高いようです。

せめてお兄様呼びで勘弁して下さい。

だけど、ハーベイ様はこの呼び方でも納得してくれたみたい。

「うん、まあ及第点かな。それじゃあ今度から、俺のことはお兄様、って呼んでね」

そう言って、ぱちりと気障なウィンクを投げてきた。

唯一の肉親リアルお兄ちゃんがそんなことしようものなら、鳥肌立って全力で気持ち悪い、ってつつこめるけど、こつちのお兄様は似合っておいでなので、何も言わない。

「ごほん。では、…お、兄様に質問があるんですが」

まだ言い慣れていないので、多少つつかえ気味なのは御愛嬌と言っ
ことで流してほしい。

「ああ、うん、今日君を呼んだ訳ね？」

今度はきちんと認識してくれたようで、やっと本題に入れそう。

「うーん、とりあえず、一つ目としては、アレクのお嫁さんっていうことで、どんな人なのか気になったから少し話してみたくなって」
オレンジ色のマカロンを指でつまみながら、お兄様は私を頭の先からつま先まで眺めた。
そして再び私の顔に視線を戻すと、にやにやした笑いを浮かべた。

「なんせ、あのアレクが自分から妻にしたい！！って国王に直々に嘆願しに行っただけだからね。兄として、そりゃあもう気になるでしょ」

「え、嘆願、ですか？」

「そう」

何それ、私そんな話、初めて聞いたんですけど。

ちらりと後ろに視線をやると、リースンも同じように目を丸くしていた。

どうやら彼女も知らないことらしい。

「その顔は、どうやらこの結婚が決まっていたいきさつも知らないようだね」

「はい、実は全く」

そもそもアレク王子様の存在を認識したのも、つい24時間ほど前ですから。

…と、もちろん馬鹿正直には答えなかったけど。

「どついう風に説明受けてる？今回の結婚に関して」

「そうですね、1週間前に、突然第3王子と結婚が決まったからよろしく！みたいな感じでしたけど」

本当にそんなざっくりとした説明だった。

言われれば、さすがに早っ！？とか急だなとは感じたけど。

ただお兄様の次の台詞は、私にとって爆弾発言だった。

「実は、今回のそれ、2年前から既に決定事項だったんだよね」

何ともなしに言うので、うっかり聞き逃すところだったんだけど。

2年前：それって、私がこっちに飛ばされてからすぐってこと???

そしてそれは王子が留学に行くその前後、ですよね。

??????

頭が混乱する。

だって、私その時にアレク様の存在は、当然知らなかったし、なのにその時に王子が私との結婚を決めていた、だって!?

謎だ、謎すぎる。

私が説明を求めるようにお兄様を見ると、彼はゆっくりと頷く。

そして、その口から色々と衝撃的な事実を語り始めました。

09 アレク様への、謎だけどんどん膨らみます。

アレク・ガイナ・プリストル。

父はエルミニ王国国王レイ、母は国一番の美女と名高いセシル。その間に生まれた4番目の息子、第3王子。

幼い頃から頭脳明晰で、3つの時からその能力を遺憾なく発揮し、その為神童と世間では呼ばれていた。

その才能は王族のみならず、貴族たちや国民も認めており、彼が8つになった頃、国王は将来彼に王位を譲ると宣言した時も、誰も驚かなかった。

頭がいいだけでなく、人を使うことにも長け、その上王族の血を受け継いでいるため容姿も極めて美しい。

ただ、彼には一つ欠点があった。

感情が欠けていたのだ。

頭がよすぎるからだろうか、喜怒哀楽、その気持ちが皆無だったため、どんな時も無表情で、まるで人形のような、と皆からは囁かれていた。

それは国王を含めた家族も心配していたことだった。

王としてはこれほどまでに優秀で適任な者はいないが、果たしてこの感情のなさはいかなものか。

何をするにも冷静沈着で、決して取り乱したりせず、世の中を達観して見ていた王子は、幼いのに子供らしくなく、そのことだけが不安だった。

ほしいものはときかれても、何もないと言う。

好きな物はときかれても、何もないと言う。

生きながら既に死んでいるようにも見受けられた。

そんな王子が12になった時、留学の話が持ち上がった。

そついうところはあるにせよ、能力的には問題はない。

将来のためにも知識を深めておくことは大切だということになり、海を越えた国へ向かうことが決まった。

勿論、王子に異論はなかった。

その、出発の半年ほど前のことだった。

今まで感情のない人形だった王子に、劇的な変化が見られたのだ。今まで誰も寄せ付けられないぴんと張り詰めた空気を纏っていたのが、急に柔らかくなり。

笑ったり、悩んだり、色々な表情をするようにもなり。

それは年相応の言動に見えた。

もちろん神童としての才能はそのままだ。

急激な変化に周りは驚いたが、それはむしろいいことだろう。

これで世継ぎとして不安はなくなったと安心していた頃だった。

留学に旅立つ前日に、彼は国王にあるお願いをした。

「とある女性と結婚したい」

もちろん、王も初めは渋った。

未来の国王の結婚相手は、政略結婚だ。その時点で相手も決まっていた。

けれど、王子は引き下がらなかった。

それなら国王になることをやめると。

そこまで言った。

これにはさすがの国王も焦った。

だからある条件を付けることにした。

「留学期間は4年だ。それよりも早く成果を出せたら認めてもいい」

その言葉を胸に刻み、王子は他国へ旅立った。

そして王子は見事にその言葉通りのことを成し遂げた。

十分すぎるほどの恩恵を自国にもたらした王子に、さすがの国王も首を縦に振るしかなかった。

相手方には、何も伝えていなかった。

どうせ一時の気の迷いだろう。

そう軽く考えていたのだ。

だが現実には違ったのだ。

王子が帰国すると、慌てて国王は相手に王子との結婚を記した手紙を送った。

国王からのそれは勅命だ。断ることは許されない。

そして1週間後。

その娘が、王子の元へ嫁いでくることになった。

「……で、エリちゃん、君がその相手だっていうこと」

お兄様は話し終わると、紅茶をすすってにつこり笑って私の目を覗きこみました。

けれど私は、美貌のお兄様に見つめられていたら普通はドキドキす

るだろうのに、それどころじゃない。

ただ、呆然としていました。

だって、だって!!

「あ、の」

もしその話が本当なら、私はやっぱり王子とどこかで会っていることになるのに。なのに全く記憶にない。あんな美少年、一度会ったら絶対に忘れない自信があるのに!

「ハーベイ様、実は私、アレク様とお会いしたことがないんです。

でもその説明だと、アレク王子は私と面識がある風ですよね」

「うん、直接会って、話もしたって言ってたからね」

話…。

一生懸命普段から使わない頭をフル回転させましたが、やはりだめです。かすりもしない。

私の記憶力が本当にだめだめなのか。

それとも……。

私は一つ、気になったことがあった。

王子が留学する半年前。そこで私達は会ったようだったが、その時の私は、まだ元の世界じゃないんだらうか。

だって、私がここに来たのは、正確には2年と1か月前。そして王子が留学に行かれたのは、今から2年と1か月前。

……このタイムラグはなんなんだろう。

ほら、やっぱり私、こっちに来ていない時だ。

それじゃあ王子の話は嘘なの???

もしくは。

人違い、とか？

思ったことをそのまま口に出すと、残念ながらハーベイ様は否定した。

「アレクは、間違いなく君だと言ってるよ。名前もエリで、年も自分より上。髪の色も顔形もあの子が言ったのとぴたりと当てはまる。それに、黒目黒髪の子は珍しいからね。そうそう同じ人は見つからないよ」

そう、この世界、日本では当たり前すぎてあふれてる黒に遭遇する率が、ものすごく低い。私も今まで一回もお目にかかったことがないくらい。

ということとは、やはり王子の言うことは本当…???

結果的に、私はますます王子との結婚に疑問をもつ結果となったのです。

10 アレク王子の、二度目の来訪です。

少し寒くなってきて、私は思わず体を身震いさせる。

やっぱり夜は大分冷える。この辺りで今日は眠ることにしようか。

読みかけの本に頬を挟むと、私は大きく伸びをした。途端に体がばきばきといい音を立てる。

かなり長い時間、同じ姿勢で居続けたから当然だろうけど。

それから本を元の棚にしまい、ベッドに体を滑り込ませようとした時でした。

コンコンッ。

唐突に、扉がノックされた。

「!?!」

こんな時間に誰だろう? リースンは、夜も遅いからと早くに自室に返したから、彼女だろうか。

私はあまり疑問も持たず扉の前に立つと、鍵を外した。

「リースン?」

けれどそこにいたのは彼女ではなく。

「やあ、エリさん」

満面の笑みを浮かべていた、アレク様：もとい私の旦那様でした。

……お昼にハーベイ様に聞いた話を思い出しました。

私は覚えていないけど、王子は一度会っていて、それ以来私と結婚したくつて王様をお願いしたつてやつ。

あの後、真相を確かめに王子に会いに行つたんだけど、あいにく留守だった。なので次に会つたらそのことを聞いてみようと思つていたのだ。

確かに、今日の前に王子がいるといのは、聞きだす絶好のチャンスではあるんだけど。

それよりも、私は現状にびっくりしていてそれどころではありませんでした。

「!?!え、えつと、アレク様???'」

そう、それは今の時間。

時計を見れば、もう2時を回っている、そんな深夜と言つても過言ではない時間帯。もちろん、14歳の少年が起きている時間でもなければレディーの部屋を訪ねるのにも相応しくないお時間。

「どうされたんですか、こんな遅くに」

私の抱いている疑問はさておいて、とりあえず、外ではなんなので部屋に招き入れてからそう尋ねると、王子はあどけない表情のまま答えた。

「うん、たまたまエリさんの部屋の前を通ったら、明りが洩れていたので顔が見たくなって」

え、だって2時だよ、2時。草木も眠る丑三つ時、って言われるほどの時間だよ？それなのに、こんな時間にふらふら廊下を歩いているなんて…。あなたは不良少年ですか。

「……アレク様、その、お部屋に来て頂けたのは嬉しいですが、今日はもう自分のお部屋にお帰りになられた方が」

けれど私のそんな言葉も、王子には全くの馬耳東風なようで、すっぱり無視するとベッドにごろんと横になった。

「!?!」

それ、私のベッドなんですけど……。

「あ、あの」

「ここで寝るからいいよ」

いや、だめですって!!!なんてことを仰るんですかこの人は!!!

「だって今朝も一緒に寝たじゃない」

いやいやいやいやそれは、王子が勝手に忍び込んで来たんですよ!?私の断りもなしに。

「とにかくっ!!!駄目なものは駄目です!!!!!!」

きっぱり言つと、王子を起こすべく私はベッドに歩み寄り……

「って、あれ、アレク様??？」

そのまま横になった王子は、ピクリとも動かない。
目をつぶって横になっている。

嫌な予感がしたので試しに揺さぶってみるけど、起きない。

やがて口から洩れたのは、規則正しい寝息でした。

「……………」

いや、寝るの、早くないですか？

そんな、5秒と経たないうちについていう勢いでしたけども。

うーん、どうしようか、まさか眠る王子を部屋に追い出す訳にも行かないしなあ。

しかし、こう改めてまじまじと見ると、王子は本当にお美しい顔を
していらつしやる。

おとぎ話の王子様も、ギリシャ神話の神様たちも裸足で逃げ出すほど。

今ですらそんな感じなんだから、もうすこし大人になればそれはもう、ものすごいことになりそう。

と。

私は今にして、初めて気が付いたことがあった。

象牙のようななめらかな白い肌。こころなしか、それが青白い。

「……………」

眼の下には、うつすらと黒い影。おそらく、クマと呼ばれる代物。

「……………」

彼は14歳だ。でも、それにしてもこのやつれぶりはどうなんだろう。

顔と雰囲気と、まるでそぐわない。

そう言えば。

私はさつき部屋で見た光景を思い出す。

部屋中に積み上げられた、いかにも難しい文面の書類の山。

ハーベイお兄様と険しい顔で話されていた王子。

そしてアレク様は将来を担う未来の国王様。

リースンも、王子は幼い頃から職務をこなしていた、って言うていた。

ならばこんな遅い時間まで、アレク様が起きて何をしていたかなんて、想像に難くない。

むしろ、一番初めに気が付くべきだった。

それに昨日この部屋に忍び込んできた時も、夜遅く、って言っていたし。

そんな時間になるまで、王子は王子としての職務を全うしていたんだろう。

道理で疲れるはず。

そのまま横になったら寝てしまっただ。

ならば寄り道なんてせずに、自分の部屋に戻ればよかったのに。

なんでそれをしなかったのか。

その理由を考えて、それから思い当って私は思わず赤面する。そして、

「……………はあ」

深い深いため息。

もしもハーベイお兄様の言う通りなら。アレク王子の言葉のままを信じるなら。

アレク王子は、本当に私に会いに来たのだらう。

「はあああ」

部屋にはソファもある。私一人眠るには十分すぎる広さだ。

私は深いため息をもう一度つくと、王子が風邪をひかないように毛布をかぶせてあげて、ソファの方へ足を向けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916z/>

私と年下王子さま

2012年1月4日03時44分発行